

ノーマア原爆

きのこ雲

原子爆弾投下時、広島、長崎

O・Oさん

摂津市鳥飼下

一九四五年八月六日 広島

一九四五年昭和二十年八月六日早朝、
テニアン基地を発進した先発のアメリカ軍の気象観測機一機が高度一万メートルで広島市内に接近し、後続の原爆搭載機B 29 エノラ・ゲイ号にむけ、晴天で攻撃可能の旨を打電した。

広島の中軍管区司令部は、観測機の侵入に対し、午前七時九分に警戒警報を発令した。爆撃はなく、まもなく退去したので、午前七時三十一分警報を解除した。

その頃、市内通勤者の群れが職場にむかっていた。安心していたその時、午前八時十五分に一瞬の光となった。また、広島市内は火の海と化した。

爆発点は、瞬間的に最高摂氏数百万度、数十万気圧となった。

一九四五年八月九日 長崎

一九四五年昭和二十年八月九日、長崎は暑い朝を迎えた。早朝からの空襲警報や警戒警報は、その頃の毎日の日課と化していた。市民はさほど驚くことなく、警報解除とともに一日の生活に入っていた。この日早朝、テニアン基地を飛び立ったB 29が長崎に向かった。

午前九時五十分頃、第一攻撃機が目標の小倉上空に達した。しかし、小倉上空は天気が悪くないので、二度目の原爆は小倉ではなく、長崎に落とされた。午前十一時二分のことだった。その時わたしは十六歳だった。

私達被爆者は、市内で百二十名だが被爆者手帳をもっていない人は約十七名ほどいる。「もう二度と原爆はご免

だ」地球上で広島型の原爆が百万発あるとかテレビや新聞でいつているが、いまの広島型の原爆は一発でその当時の百万倍の力があるといわれており、その威力の凄さが大体わかると思う。今後は、みんな二度と戦争をしないようにと思う毎日です。わたし達被爆者の平均年齢は、もう六十五歳です。今年被爆四十周年を迎え、一日でも長生きして戦争の怖さを話していきたいと思えます。

二度と許すまじ原爆を

原爆体験の記 ひろしま

T・Aさん 79歳

摂津市正雀本町

昭和二十年八月六日、終生忘れる事のできない日である。快晴であり陽射しも厳しかった朝七時、食事を済ませる。婦人会から予告通知があったので、隣組婦人十人と一緒に一五〇メートル離れた観音川の堤防へ出かけた。

そこでは、港から流れる海水で塩を作る作業をしていた。堤防の中央には、直径七〇メートルの水槽へ男女五十人程で、バケツリレーで水を汲み入れる作業を続けていた。女はモンペ姿、男は国防色のシャツに腕章、脚にはゲートル巻の団服であった。ちよつとすると、自分のモンペがぬれたので、簡単服一枚でつづける。暫くするうち、警報もなしに突然ドカンという大音響

と同時にピカツと光った。気がついた時には二〇メートル程飛ばされ倒れていた。起き上がり、辺りを見ると人影が無い。そのうち男子が一人近くにあった水槽に飛び込んだ。

付近を見渡すと、何がなんだかすつかり変色して、自分の生死の程も判らなかつた。主内川の向こうから、オレンジ色の真つ赤な大気が空一杯広がって押し寄せて来た。同時に風圧で震度五以上の大地のゆれが起きてきた。

「これは、たぐいのないことだ」と思い、自分も水槽へ入る気になり潜り込んだが、深いので脚が届かない。水槽の縁をつかみ、水中へ頭を入れたり出したりしていた。ふと前方を見ると、並ぶ家屋の屋根瓦が、ガラガラと音をたてながら崩れ落ちてきて、見る見る付近から火災が起き煙が立ち上がっている。時間はどの位経ったのか、やっと地震が静かになったようだ。我に

返り、水槽より這い上がって周辺を見渡すと人影がない。

今から思うとあれが原爆だったとは。どうやら腹這いになれば家まで戻られそうなので、ガレキの上を夢中で這ってたどり着いて見れば、家は崩れ、家内はガレキの山。足の踏み場もない。家族の姿も見えないので、てつきり家の下敷きになり亡くなったのかと思つた。大声で探すうち少し離れた畑の中で避難していた。壁と壁の真ん中に居たので、頭に少々の怪我で済んだようだ。暫くするうち真黒い雨が降ってきた。急ぎ木蔭に入る。半ば崩れた家屋へ入ると瓦礫でどうにも手の施しようもない。ふと、自分を見て驚いた。上半身に着用したものはポロポロで黒こげの切れ端が付いていた。

夕刻になると体が次第にぞくぞくして発熱したようだ。用意の食用油を全身に塗りつける。翌朝から次第に熱が

出て、起き上がれない。二日目からは、自身夢中で判らなかつたようだ。それから、後に母から聞いたことだが、微熱でうなされ「痛い痛い」と言い続けて一睡もできなかったそうだ。市中の病院の医師は全滅し、手当てができず困っていた。家へ、九州から派遣された軍医さんがタンカを持って学校へ私達を収容するため、迎えに来たようだ。

さて、収容されて見ると、今にも亡くなる人でいっぱいである。にぎり飯は真っ黒くなる程蠅がたかり、あちこち痛い痛いとうめき全く生き地獄。この有り様では、手当てどころか死を待つばかり。雨もりがしても自宅が広いので死ぬのであればそちらの方がいいと思ひ無理に頼み、母は連れ帰ったという。

翌日から軍医が診察に来てくれた。その都度、大きな筆を持参して、化膿した体を大筆でかき集めて手当して頂

いた。相変わらず寝られず「痛い痛い」と言いつづけたので、軍医さんが気の毒がり、睡眠薬を飲ましてくれと少し眠るようになったと母が話してくれた。今からおもえば軍医さんの看病のお蔭で助かり今日あるのである。手、脚、顔、首、胸など火傷の箇所が多いので、家族は到底助からないと思つたそう。

私は幾日たったのか判らぬうち、気づいたときは二十日位たったようだった。流動食が通るようになったが、食糧は無い、夜は電気も水道もない。二、三日すると大雨で橋は落ちて、洪水で膝下まで水の中。そのなかを歩いて近所の井戸水で用たした。私に使つた包帯の洗濯物はバケツ二杯もあった。相変わらず物資は全く無いので、敷布を破り包帯に使つたようだ。五週間位から床に座れるようになったので、早速、初めて自分の顔を鏡に写して

ビツクリ。唇は鼻まで届く程腫れ上がり、顔半分は薄黒く、首は左へ傾き、手脚や腕はケロイドが甚だしく、次の瞬間私は「死んだ方が良かった」と思つた。母親の必死の看病で一命は取り止めたものの、何時白血病で倒れるかも知れない。その不安は今日に至るも付きまとう。

さて、掃除、整理、食糧集めなどで一日を過ごすようになった私を見舞いに来てくれた人々も、三、四十日位の間に髪は抜け、吐血して次々と亡くなった。広島市民は、家族一人から家族全員まで被害をこおむっている。そのような状態であつたので、中心街の惨状は見る事ができなかった。さて、床離れして以来、雑用等に追われているうち、戸、障子などが必要になつた。幸い家屋の一部に積み重ねてあつたのが間に合い、私は立ちかけることができたので雑用に追われる。私の姪は昭

和十九年からこちらにきて山中女学校へ通学していた。当八月六日学校動員で市街地の家屋引き倒しの作業に出立ったまま待てど待てど、戻って来ない。

また、私の兄は東京から広島へ商用に来て途中で被爆した様子で、二人共遺体を見る事もできなかった。姪の母親は大阪に住んでいたもので、戦後何度も広島へ来て調べた結果、姪は広島で亡くなったと判明した。昭和二十年の末だった頃、市電に乗った時窓ガラスが黒くなっているのによく見ると、それが蠅であるのに驚いた。臭気がするのでマスクを使用する有り様だった。一步通路より入るとガレキの山、古自転車の山。車内には、金歯の付いた頭、ガイ骨までまじっていた。それから、月日が経ち四月の雨の降るある日主人が復員して来た。南方よりもどつたので一カ月程は放心したようだった。

さて、月日が経過するうち、私のケロイドが固まったようなので、四月に家族の反対を押し切って手術を受けた。日赤病院の外科の先生が話すのには

「被爆者の手術は貴方が初めてだ」と言われた。続いて九月の初めに、第二回目の手術を受けた。先生が話すのは「貴方は当時二種の火傷で助からないほどだったのが、水槽に一時入ったので、ここまで良くなった」といわれる。それに麻酔は充分でなかったのわずい分と痛みが激しかったと記憶している。四十年経った今日では、傷も小さくなり裸にならねば外観ではわかりにくくなっている。

しかし、白血球はまだ人並みより少なく、検診のたびに注意を受け、脊髄症のため、脚、腰が悪く、年中通して通院治療を受けている。私以外、近親者も経験は判らぬ。再び戦争なきよう平和を念じる次第である。

思いだすと被爆以来十年程は声が出にくく対話もできにくかった。耳鼻科へ通院した時、「これは咽に隙間ができていたので発音がむずかしいから良くなならない。被爆のためだということ忘れてしまうようにしなさい」といわれた。ケロイドの手術の後は皮膚がないので、夏は汗のためかゆくなり、冬はチクチクと痛みが七、八年続き、その都度人知れず涙したものだ。

家庭の事情で母と二人で大阪の生活をはじめ、不慣れの雑貨店を営んできたが、母も三十九年に他界したので自分だけの商いを友として今日まで過ごして来た。

戦後四十年、何はともあれ反核運動に徹して頂きたいと強く念願している。

原爆に遭って

原爆被爆者

その日も暑い夏の朝だった。

八月六日の歩哨にたつため、衛兵要員として中隊の朝礼に整列する。先ほど警報が解除になり、ほっとしたのも束の間、中隊長の訓示の終わる頃、急に飛行機の爆音が聞えてきた。

どれ程の高度なのか見当もつかない。強い太陽の光をうけて銀色にまばゆく輝いて、小さく見えた模型のような飛行機は三機の編成隊だ。「おい！見ろよ B 29だ」隣の戦友に小さくささやく。ゆっくり東から西へ飛んでいく。

週番将校の訓示の半ば「中部軍情報……」とスピーカーから流れた。敵機はすでに侵入しているのに情報が遅い。そう思っている時、ピカッと光った。その色をどう説明していいのか分からないが、一瞬目に入ったものは稲

妻と火災の炎を混合したような光だった。と同時に強烈な圧力が全身にかかって、わからなくなる。意識を失った。

自分を取り戻すのにどれ位の時間を要したであろうか……。必死にもがいたような気もある。助けを求めて泣き叫んだようでもある。「胸が苦しい！」ふたたび意識を失いそうだ。「もう、駄目だ」と思った。目を開こうとするが痛くて開かない。両眼をこする。ただ真っ暗で何も見えない。うつ伏せになったままだ。

周囲を見渡すと、やがて次第に夜明け前のようにしらじらと明るくなるのがわかった。「ああ、よかった！眼は大丈夫なんだ」しかし、はつきり見えない。眼を触ってみた。臉がぶよぶよしている。左眼は潰れて、右眼が少し開いていた。起き上がろうとするが身体のがきかない。何かの下敷きになっている。早くこの場から這い出さ

なければと懸命にもがく。柱や梁の下敷きになっていた。頭の傷口からの出血で顔がぬるぬるする。僅かのすき間から漸く這い出すことができた。はじめて見た光景は、先ほどの夏の太陽の光が失われていた。上空から拳大の瓦、木片、土砂、紙などありたけの物が落ちてくる。太陽の光を遮っているのだ。

先程の爆弾による爆風だと思った。朝礼の時の自分の立っていた位置と意識を失っていた位置とは全く場所が変わっていた。やはり爆風によって吹き飛ばされたのだ。一〇メートル位はあったであろう。隊の仲間が私と同じように血を流し、顔は火傷で脹れ上がり、軍服はズタズタにひきさかれた姿で泣きわめいている。自分の身体が熱い。服が、くすぶっている。あの光線で服に火が付いたのだ。服の上下共、もり上っている箇所がそうであった。上衣

は袖の上部と上肘、ズボンは膝頭の部分のポケットの箇所が、特にくすぶりが激しく、今にも一面、火に包まれそうだった。急いで服のボタンに手をかける。火傷で脹れ上がって指に力が入らない。上着だけはやっと自分で脱げた。次はズボンだ。ズボンは私の力では脱ぐことができなかった。両手共、

指は曲がったまま開く機能を失っていた。仲間に巻脚絆をといてもらい、靴を脱がしてもらおう。誰かが「比治山に逃げよう」と叫ぶ。十人位集まったであろうか、両膝の負傷で歩きにくい私に二人が肩を貸してくれた。

校庭（中隊は学校の一部を兵舎として使用していた）で女の人が乳飲み子を抱いて何か叫んでいる。女の人の頭の髪はチリチリで坊主に近い。頭の傷だろうか顔は血まみれだ。殆んど上半身裸だ。モンペは腰の近くまでズタズタにちぎれていた。抱かれている赤ん

坊は、まるで肉のかたまり同然。今ペンを塗り終えたように真っ赤だ。そしてペシヤンコになった校舎の入口で母親は叫んでいる。子供の名を呼んでいるのだ。夏休みの補習授業に登校した我が子の安否を気づかっただろう。その姿は一生涯忘れない。今でも睨に焼きついている。

比治山へ逃がれる途中、川べりの潰れた屋根の下から「兵隊さん助けて！水を、水を」と耳にするも、どうしようもない。比治山に着いて、看護兵より黒い油を水脹れの上に塗って貰う。頭から顔面、首、両腕、両手、両膝、

左大腿部、身体中が油で真っ黒だ。昼頃、小型機の機銃の攻撃をうける。四つん這いになって松の木の下に隠れる。両膝の水脹れは破れ血まみれになる。日はとつぷり暮れた。市内は火の海だ。救援隊が待ち遠しかった。救援の軍のトラックが着いた時、われ先にと

負傷者が群らがる。一台か二台かのトラックで、宇品とのピストン輸送だ。ようやく私の番になった。トラックの荷台が高くて負傷した足では上がれない。数人の人が手を貸して下さった。宇品までの途中、蜘蛛の巣みたいに垂れ下さった電線から火が噴いて行き先を阻む。バックして他の道へ方向を変える。荷台の負傷者の血の匂い、水脹れが破れてそのリンパ液の臭い、それは異様だった。

宇品にようやく收容され、我々軍人も、民間人も所せましと横たわっていた。私は戸板にのせられていた。

「水、水、水を」と泣き叫ぶ者。看護の人から飲み水をいただいで、飲んでいくうち死んでいく者……。 「庭先の水道の配水管から水が出ている」と誰かが言った。私も皆の後に腹這いになって続く。外は暗く手さぐりで階段を降りる。同じ隊の者が水を飲んだら死

ぬと前に立ちふさがる。隊の者は私が誰であるのか判るはずもない。既に顔だけでは男女の区別さえつかない形相なのである。判別のつかないことを幸いに、うわごとを言ってるみたいに変人のような態度をとった。そうしないと水を飲ましてもらえない。時間をどれ位要したのか、どれだけの水を飲んだのか自分でも忘れていたと思う。

水の美味しかったことは忘れない。広い収容所の前庭で死体を焼いている。風にあおられ火の粉も舞い、異臭がものすごい。夜中二回の空襲をうける。二回目の時は誰も手を貸してくれず担架に仰向いたまま運を天に任せた。父、母の顔、妹二人の顔が浮かぶ。扇に笑った顔が映った。安らかだった感じだ。私の開いたままの両手は指先だけで組まれ、いまも胸にあったことを覚えてる。

二冊の絵本にみる戦争と平和

O・Mさん 28歳

撰津市鳥飼中

小学生の頃、『原爆の図』を見ました。戦争ってこわいなと思いました。

十七才で、丸木俊さんの絵を見ました。少年と少女の絵です。一枚の絵を見ているというのではなく、一人の人間と対面しているようでした。

「少年、少女の目は、私の心を見ている。そして、私すら知らない私の歩むべき道をも見通している。これを見た丸木俊さんって、どんな人かな」と思いました。

二十八才の今、丸木俊さんの絵本『ひろしまのピカ』を見ました。私は原爆について何も知らないと思いました。

この絵本は、このおばさんの話（子どもの手をひき、傷ついたご主人を背

負って、逃げ惑ったひろしまのピカの時のこと）をもとにし、わたしが見たり聞いたりしたたくさんの原爆体験を織りあわせてつくりあげたものです、と後書きにあります。

「ピカは、ひとがおとさにや、おちてこん」と、絵本は結ばれています。

この言葉は、「どうして、この前の戦争が起きたのか」と私達に考えさせます。

ひろしまのピカを「新型爆弾」と政府がカムフラージュしているうちに、
「フアーレル原爆災害調査団は東京に帰るとすぐ「原爆で死ぬべき者は死んでしまい、原子放射能で苦しんでいる者は皆無である」という公式発表を行った。

また九月十九日には、広島と長崎の被爆実態を国際社会から秘匿する目的で「日本に与える新聞遵則」を（GHQは）発している。……その

結果、新聞、ラジオをはじめ出版を含む日本の言論界は原爆の報道、論評を一切タブーとしなければならなくなったのである」（ドクター・ジュノー『武器なき勇者』大佐古一郎訳、新潮社より）という状況になりました。

「ピカが何か」も知らず、広島や長崎の幾十万人の人々が死んでいき、今なお苦しむ人々がいます。ひろしまのピカは、核戦争時代の幕を切って落しました。

今や、核戦争による人類全滅が案じられ、アメリカ原子力科学者協会は「One World or Not」世界は一体か、全滅か」と訴えます。

米ソ両国が迎撃第一攻撃を承認し、核戦争が起こり得ると発表した一九八〇年に、絵本『ひろしまのピカ』は出版され、アメリカ、スウェーデン、デンマーク、イギリス、オランダ、フラ

ンス、ドイツで、それぞれ翻訳されています。

そのことをみても、核兵器廃絶を、そして平和をいかに多くの人々が願っているのか分かります。

広島原爆の閃光を岬ごしにみた少年がいました。劇作家・児童文学者である、さねとうあきらさんです。さねとうさんは絵本『きばのあるヒツジ』

(絵・井上洋介)を書きました。

心優しかった人々も、国家総動員法等により、まるできばをつけたヒツジのように、戦争に加わっていききました。戦争しか知らない子供だった彼の体験が下敷きにあります。

とりわけ、きばのあるヒツジときばのあるカモシカの隊列が向き合う場面は印象的で、アメリカとソ連、イランとイラクのようにもみえます。

その場面を見てみると、キリストのつるぎをもとに納めなさい。つるぎ

を取る者は、みな、つるぎで滅びます”という声が、どこからともなく聞こえてきます。

“相手の事を考える、相手の身になる”という自然が人類にプレゼントした制御装置を放棄する時、私達は全滅への道を確実に歩んでいくのです。

また、さねとうあきらさんは、

“どういう形であれ、(弱い者いじめ)がはじまったら、りっぱな(戦争)です。老人や子どもがまっさきに

やられる(公害)や(交通地獄)も、勉強のできる子ばかりがのさばる(受験戦争)も、ぼくにとっては、にくむべき(戦争)なのです”(『ばんざい

じつさまと私』中学生版『にんげん』所収より)と、新たなスタイルの戦争が始まっていることを書いています。

彼の『ばんざいじつさま』『神かくしの八月』『戦争にでかけたおしらすさま』

も、戦争と平和を考えるうえで大切な作品です。

“歴史は繰り返す”と申しますが、昭和の初めの日本ファシズム体制、議会の形骸化、軍部独裁、軍事費増大等々の歴史を私達は持っています。

原爆投下の一九四五年、丸木さんは三十三歳、さねとうさんは十歳、『きばのあるヒツジ』に絵を付けた井上洋介さんは十三歳でした。

そして今、『ひろしまのピカ』『きばのあるヒツジ』を彼等は世に送り出しました。

私は、独身の頃は、「自分の好きなことをしたい。どうにかなるさ」と思っていました。しかし子供に恵まれてからは、生命のすばらしさ、生きていくことの尊さを感じます。この二冊の絵本を通して「子供達のためにも、より暮らしやすい社会であって欲しい。また、人間って粘土の塊みたいだな。

軍人にもなるし、リベラルな人間にもなれる。その作り手は、きっと人的環境を含めたまわりの環境です。そうだ、それは教育だな。それによって、人間は感性や価値観を左右されるから。私もいろんな人の声に耳を傾け、話し合い、成人として何をなすべきか、考え行動していきたい。そういう自覚を、一人ひとりが持てば、より暮らしやすい社会が実現する」と思いました。

さて、『ひろしまのピカ』『きばのあるヒツジ』を貴方は、どのようにご覧になるでしょうか。

被爆直後の思い出

S・Hさん 56歳

撰津市千里丘東

「熱いよーいたいよー」と泣き叫ぶ女性の声で家の前に出て見ると、体の左半分の服が焼け、腰のあたりがくすぶっているのを見つけ、夢中でもみ消してあげました。よく見ると左肩から腕にかけて黒ずんだ皮がたれさがり、はだが赤黒く焼けただれていました。近所の人ではありませんでしたので、早く家に帰り、手当をするようにと別れました。

二時間ぐらい過ぎた頃、妹の学徒動員先の広島西電話局の方面も被害が出ているとの噂を聞き、安否を気づかっ

側の家が燃えて熱くて通ることができませんので、迂回のためえんこう橋（広島駅より南西二〇〇メートル）まで行きました。

橋には数多くの人達が集まっており、倒れたままの人、泣き叫ぶ人、どの顔もまっ黒です。両側の水辺には頭を水の中に入れたままの状態の人達がいっぱい。多分死んでいるのでしょうか。その数は五、六十人はいたでしょうか。原爆の熱線を受け熱かったのでしょうか。橋ぎわの軒下の防火用水にも七、八人の人が頭を用水の中に入れたままです。

子供が親をもとめて大声で泣き叫び、大人の人も何かを大声で叫びながら右往左往しています。その中には頭髪が焼けちぢれた人、頭や体から血を流しながら大声を出して走っている人がいました。服や下着等がほとんど焼けて全裸にちかい人がうずくまりながら何かを叫んでいます。また道端に倒れた

母親らしき人の背に、赤ちゃんがまわりついていきます。悲惨と言うか生き地獄と言うか!! 「水、水」と言いながら、焼けただれた手を出す人、「たすけて」と手を出す人。しかし私も妹をもとめて、一刻も早くと思いい、熱風の中を必死でしたので、どうする事もできませんでした。

でもほとんどの両側の家が燃えていて通行することができず、断念せざるを得ませんでした。さいわい私の家の地区は火災の発生がなく、どの家も屋根がわらが一部飛び、窓には戸がなく、家がかたむいた状態で残っていました。町内の人々が、また空襲があるといっていたので、一キロ南の畑やぶどう園がある指定避難地に、十二時頃父母と一緒に移りました。当時私は十六歳でした。

町内の避難先に、次々と身内や知人をもとめて火をくぐり、火に追われた

人々がつかれきった姿であらわれ始めました。

母親を故郷に送りとどけるよう父親に指示され、汽車が動いている安芸中野駅に向け、約一〇キロの道を母親と共に歩き、国道二号線の大洲に出ました。その間、死んだ人達をのせた荷車や大八車を見ました。かぞえきれないほどの人達が身一つで傷ついた姿のまま、広島からのがれるように、長い行列をつくり、東に東にと力なく歩いていました。

T・Kさん 41歳

撰津市正雀

戦争と平和

背中合わせじゃ

平和の鳥も泣きだしそう

心とコブシをにぎりあい

世界中みんな心を一にして

心の安らぎ見つけよう

戦争が平和に変わる日はいつか

しあわせ築け日本の

二十一世紀に

平和

T・Sさん 当時12歳

摂津市正雀

戦争の経験は、ぼくの父も母もありません。でも九州のおばあちゃんはあると聞きました。ぼく達はテレビで見たり、父や母が読んでいる新聞の説明を聞いたり、学校で勉強して、そのため広島市へ原爆展や原爆ドームを見物に行きました。「なぜ」戦争が始まるのか、なぜ争うのか、ぼく達には分かりません。父になぜ戦争のあったことを見せるのかとたずねたら「二度と戦争が起きないように、悲さんな、気持ちの悪い所を目でたしかめてもらうためだ」と言いました。

平和な未来はぼくたちで作らなければならぬから、広島で学んだ事を忘れないで「二十一世紀を背おって行くようにということ」

よく考えてみると、学校の友達の中でもよく争いがあります。よく一人ひとりが話し合えば争いはないのに。強い人が弱い人をいじめる事も、弱い人が四、五人でいじめられるのも、戦争の始まりだとぼくは思います。

平和とは一人ひとりの努力と協力で国や町を「作る」ことだと分かりました。だけどなぜ人と人が殺し合ったり、にくみ合ったり、なぐったりするのか分かりません。平和の意味をどんな見方してやるんだろうと不思議に思っています。争いは言葉の一言でおきることを父の話で知りました。お母さんは口ぐせで「上に立つ人がシツカリとしていけば、戦争も争い事ありません」とよく言います。たとえば「家は大黒柱ひとつでたおれたり、しゃんとしたりする。子供にとつては大黒柱は心と根性だ」と言います。世界の人達みんなの根性がくさっていなければ戦争は

起こりません。平和の国を作る心と話し合いの精神と努力があると戦争は起こらないと思います。学校内暴力も同じことだと思います。国と国との争いも友だち同志のけんかも小さいうちになくせば平和が続くと思います。

核と雑炊

M・Sさん 63歳

撰津市東正雀

台風接近の前兆である黒い雲が、広島
島の街に低くのしかかって流れていた。
原爆慰霊碑の前に、私が額突いたその
日は、一九七五年の残暑の夕刻であっ
た。

戦うことのむなしさは、旧軍隊で体
験済みだが、あの惨禍をもたらした原
爆については、長年、マスコミを通じ
て見たり聴いたりする程度のものであ
った。自己意識として確固としたもの
を持ち合わせていなかったと言うのが
本音である。〈百聞は一見にしかず〉
とか。

原爆資料館を見学するべく、ひとり
で山陽新幹線の車中の人となった。
館内の展示の品々を、見学する人び
とは、私を含めて余りのショックに、

言葉を交すこともなく、一様に押し
黙って見入っている。悲惨な実態をつ
ぶさに見終えて出口に向かった。備え
付けの記帳簿には、「戦争の意味を風
化させないで、国民みんなが考えてゆ
こう」と書いた記憶がある。

非核三原則とか、専守防衛とか、お
題目はよろしく唱えているが「日米安
保案約」は、もはや平和条約の名を冠
することができないほど後退したもの
であり、国民はなし崩しに慣らされて
きた。戦争遂行者の言いなりにならざ
るを得ず、残忍な殺人者と化した過去
の苦い切ない思いを、私たち戦争体験
者は、次の世代に遺産として残さねば
なるまい。

現在、核戦争偶発の危険性を、否定
しきれない状況にあることは自明であ
る。核を保有する国々は、核兵器の研
究開発に、核ミサイルを宇宙で撃ち落
とそうというアメリカの戦略防衛構想

(SDI)などに、気も遠くなるよ
うな巨費を浪費していることだろうが、
この支出が人類の和解のために使われ
る時は永久にあり得ないのか。近い将
来、アメリカやソ連の原水爆基地が無
用の長物となり、観光地となることを
思うのは、それこそ、夏の夜の夢か。

私が住む撰津市も一九八三年三月に
「護憲平和都市」を宣言した。二年目
の昨年は八月十五日の敗戦記念日に、
戦時下の耐乏食生活を若者たちにも追
体験してもらおうと、雑炊、おかゆな
どの試食の場を設けた。老若男女、多
数出席したと報じてあった。飽食時代
の昨今、喜ばしいことである。

わが家の八月十五日は、もう十年来、
このような食事を三食囲むことにして
いる。現在小学生の三人の孫たちにも、
当日は間食を一切与えずに、梅干ひと
つと、一杯の雑炊で過ごさせている。
著を動かそうともしない孫たちを見て

いると、いろいろのことが思い浮かぶ。

平和の有り難さ、戦中、敗戦直後の混乱を生きてきた歲月のひとこま、ひとこまが……。その慣習も最近崩れようとしている。一昨年あたりから孫たちの悪知恵が働くのか、親が物判りがよいか、心配りなのか、時期が丁度、盆の休みに入るので、親子して前日あたりからびわ湖方面へ逃げ出す。あとは祖父母が懐旧の情をもないまぜにして、ひと日の食事となる。

この地球上にあくまで人があり、いのちがあつてこそその科学の進歩である。平凡な心優しい男たちをして、人間を殺傷せしめることが、慣れとなつて通用する事態が起こらないよう、孫たちがもうすこし成長した時点で、じつくりと対話してみるつもりでいる。

戦禍悲傷

粥すすり梅干ひとつ口に
三度食べたり敗戦記念日

間食を与へずひと日粥ばかり
孫に食わせば箸の動かず

爆死せし友のみ霊に供養すと
数珠しのばせて妻の旅立つ

終の忌に友の精霊を鎮めきて
胸のつかへも消えぬと妻の言う

それぞれの思ひに黙して見つめをり
語りつぐべき原爆の図を

(丸木夫婦原爆の図展にて)

天皇を信じて生きし二十余年

南の島より兵還りきぬ

天皇にグアムの最後を伝へむと
うつろなる目をあげて兵言う

皎皎たる如月の月背に浴びて
営門出でし兵還らず

隊伍組み白布巻きたる銃を持ち
征きたる兵ら土佐沖に沈む

馬糞積む厩舎にかくれ意地悪き
下士官の眼にをののきし日々

馬を牽き海に落ちゆく赤き陽を
ながめたりしは死を怖れし日

鞍上につけし擬装のもちつつじを
愛しと見しは遠き兵の日

営倉の鉄の格子にしがみつ
叫びみたりし兵忘れず

四十路^{よそ}経^じし今も忘れがたし
おのがいのちの軽きに泣きし日

一瞬にして地獄絵

―長崎の女学校時代―

Y・Aさん 54歳

摂津市南別府町

戦後四十年になりますが、私にとっては、原爆の怖さは今だになまなましく思い出されます。私達は出雲町に住んでいましたが、父が兵隊に行き空襲がひどくなったので、母の里である五島に疎開しており、私だけが下宿して長崎の女学校に通っていました。その頃は学校に行つて授業を受けるより学徒動員でかり出され、私は市役所の人員疎開のお手伝いをしていました。

その日はお昼のお茶の準備中に空襲警報がなり、防空壕に避難の命が出ました。

漸くして、警戒警報の知らせで室に帰つて間もなくのことでした。ピカーとして窓ガラスがオレンジ色になった

ので、照明弾が側に落ちたのかと一瞬思い外へ飛び出たとたん、窓ガラスが割れ、壁が落ちて回りがこわれて何が何だかわからなくなり、気がついていたら知らない男の人の膝に顔をふせていました。驚いて顔を上げると男の人に血がべっとりついていたので、男の人が大怪我をしていると思つたら怪我をしたのは私で、ほおから鼻の下にかけてガラスで切り、鼻の下には破片が入り込んでいました。

それから何処をどうして行ったのか、気がついたら寺町の墓場に立っていました。そこにも避難して来た人達が沢山いました。私の側にいたおばさんの赤ちゃんがひどく泣くので、のぞいて見ると、赤ちゃんの右耳が切れてないので、驚いておばさんに知らせると、何も知らなかったらしく、いそいで子供をおろし、泣きだしてしまいました。私もオロオロするばかりでつれ

だつて病院をさがしたのですが、町は崩壊して誰もいません。やつとの思いで日赤病院に行ったのに、病院には大怪我をした人、洋服が焼けて皮膚が腰にぶら下つた人、全身火傷をした人達がタンカで次々運ばれて来るのです。私などは怪我の中にはいらないと叱られ、おばさんと別れ下宿に帰りました。下宿の人は帰りが遅いので心配して待っていて下さいました。

その夜、一緒に下宿しているお友達が帰つて来ないので、翌日怪我をしている人達を収容している新興繕小学校にさがしに行きました。

学校には何百人もの動けない重傷の人達が床の上に寝かされ、足の踏み入れるすきもないほどでした。そこには目も見えないのに家族をさがして名前を呼んでいる人、口もきけずに目で何か言いたさそうに苦しんでいる人、水を欲しがっている人、次々に目の前で

死んで行く人達。一人でも助けてやりたいと思つてもどうすることもできず、ただ見ているだけです。可哀相で涙がこぼれてくるのです。

お友達もさがすことができませんでした。元気でいてくれることを祈っております。

夜になり、県庁の窓から火が吹き出して来ました。下宿もあぶないから避難しようということになり、とつておきのお米を食べさせて下さいました。ギンシヤリのおにぎりで、何もおかずはありませんが最高のごちそうです。今では考えられないことです。大事な物は防空壕に入れ、知人を頼って戸石まで夜道を歩くのです。日見トンネルは軍需工場になっており通れなかったのですが、避難する人達のため半分が開放されており、山道を通らずにすみほつとしました。トンネルを出ると道の両側には、疲れ果てた人達がごろご

ろ寝ているのです。私達も三時間ほども歩いたでしょうか、やつとの思いでたどりつきましたが、その家には不発弾が落ちており、近くの牛小屋に寝かされました。

むしろを敷いた小屋は暑くて、そのうえ蚊が多く臭いはするし、時折牛角で戸をたたくのです。私たちは我慢できず、家族の人が住んでいるお縁に腰かけ一夜を過ごし、早々に下宿に帰りました。下宿は無事でほつとしました。私も五島に連絡が取れず毎日波止場に行くのですが、なかなか帰る船は見つかりません。そんな折五島から一緒に来ていた下級生に会い、下宿していた親類の叔母さんが、浜口町で死んでいるのを見つけたけど、一人でどうしようもなく困っていることを聞き、二人で火葬に行きました。駅より先の変わり様には本当に驚きました。建物は全焼して見渡す限り焼野

原です。そこは私の想像もしなかった、まるで地獄絵でも見ているのじやないかと錯覚を感じる光景でした。焼跡には黒こげの死体や傷ついて見るも無残な死体が、所狭しところがっていました。私達も建物の燃え残りを集めて死体の上のせ火葬しました。焼けるのを待っている間も敵機が飛んで来るので、近くの防空壕に駆け込むと、中にも入れないほど重なり合った死体の山です。不思議と悲しいとか、恐ろしいとか思わなかったのは、どうしてだったろうかと今つくづく思い返されます。これを書き出してから毎日のように当時の夢を見てもうなされ、今さらながら原爆のすごさを思い出しております。このようなことが二度とおきないように祈っております。

長崎での戦争体験記

○・Hさん 61歳

撰津市鳥飼新町

その頃、私は長崎県のある小さな島に住んでいた。忘れもしない八月の暑い日のことであった。その日は朝早くから、ひっきりなしに爆音がして私達は不安におびえ、仕事も手につかずにおろおろするばかりであった。

日本の最西端の小さな島では、飛行機などめつたに見ることもなかった。ところが、操縦士の顔さえはつきりみえる位の低空飛行で旋回する異状さにも気がついた時には既におそかった。間もなくあちらこちらで激しい機関銃の音。人々の悲鳴の中で私は何度も転びながらかろうじて防空壕に走った。先に壕に入っていた人々はどの顔も蒼白で、わなわなふるえて、すさまじさを語るにも言葉にならなかった。不安

と恐怖の中で時がすぎ、やがて爆音が遠のいたので防空壕を出た。みれば私達のうろたえ、おののく姿をあざ笑うかのように航空母艦が、遙か水平線の彼方に銀色の船体を夕日に照らしながら悠々と北上している。届くものなら浜辺のありつたけの石ころを投げつけてやりたかった。それが無駄なことだとわかっていても、今までの苦しみを考えると胸の憤りをどうすることもできなかつた。

「長崎がやられたとバイ。殆んど全滅に近かとげな。恐ろしか……」と言う噂の中で今まで聞いたこともない「原爆」と言う恐ろしい言葉を耳にした。巨大なきのこ雲が消えた後には、大勢の死者がゴロゴロして、まるで地獄をみるようだったと言われている。当時、私と二つ違いの弟も、徴用工として浦上の軍需工場で働いていたが、

一瞬のうちに十九才の青春を灰と化してしまった。

次々と送られてくる情報は暗いニュースばかり。一体どうなることやら。生きた心地もしない一週間がすぎた頃、やつと終戦となった。「戦争に負けた!! そんな馬鹿な。信じられない。敗戦だなんて」と誰もがそう思い、敗戦を信じようとしなかつた。けれども「……耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」と玉音放送があり、敗戦は確実なものとなった。これまで日本は戦争に負けたことがなかつた。いざという時は神風が吹いて必ず守護してくれると信じていたから、どれほど悔しく情けなく思ったことか。敗戦国のみじめさ、いつ彼等が上陸してどのようなことをするかも知れないと言うことで、私達は終戦となっても片時も竹槍を離さなかつた。

無気味なほど静かな日が続いたが、間もなくあちらこちらで漂流物が発見された。勿論日本の品物ではない。中には小麦粉、砂糖、缶詰等、当時の私共にとつては貴重な品ばかりだった。粗食に馴れていた者にとつては、どれほどうれしかったことか。噂は次々と広がり、わざわざ小舟を出して沖合まで探しに行く人もいた。そんな矢先、近くの島に黒い物体が流れ着いた。戸数二十戸足らずの集落で、若者の殆んどが兵隊にとられ、島には老人、女、子供が住んでいた。人々は食糧に期待をよせて総出で引上げにかかった。海中から砂浜にあげたとたん突然「ドカン」とものすごい爆発。皆遠くの方まで手足も引きちぎられて飛ばされた。

小さな島の人達は、それが機雷であることを知らなかったのだ。残った人達はあまりのむごさに唯、呆然としてなすすべもなかった。それから夜毎々々「ヨイヤコリヤ、ドカン」と物音がして眠ることが出来ず、遂に島を捨てて逃げ出した。狐狸のしわざか、それとも死者の霊か、さぞ、無念で浮かばれなかったことだろう。無人島となったその島は、夜になると怪しい光が浮遊して漁船を悩ましたということだ。このように飢える者の悲劇は戦争が終わった後でも続いた。

私達は常に「欲しがりません勝つまでは」の合言葉を胸に刻んで、じつと辛抱してきた。戦場でも多くの人達が戦死し、また銃後でも、原爆、空襲によつて殺され、これ以上は耐えられず忍びがたかったことだろう。

あれからもう四十年がすぎた。悪夢のようなあの日を思い出すたびにぞつとする。戦争を知らない子や孫達に、私達が経験した過去の苦しみを決して味わさせてはならない。戦争のない平和ということがどんなにすばらしいことか、今の幸せをつくづくとかみしめている。

被爆する

○・Hさん 70歳

撰津市南別府町

赤穂師団司令部に帰隊。残務整理を手
伝い八月二十五日召集解除。

私は岡山県の出身者です。昭和二十年三月、三度目の召集。岡山部隊に入隊す。五月一日付で暗号教育下士官として広島一二一部隊に派遣され、通信及暗号教育を一カ月受ける。岡山部隊に帰隊。七月一日付で広島北白島の新設赤穂師団司令部に暗号係として転属す。

八月六日、原爆投下。被爆。二階建木造兵舎の下敷となり、上半身ガラス破片多数を受ける。東練兵場付近の山を三カ所登り戸坂村^{ひさか}という部落に避難。民家に五日間世話になる(五名)。その後、夜行の汽車にて島根県石見太田町の小学校に収容せられる。八月十五日、小学校にて終戦を迎える。一応、広島

戦争と原子爆弾が

私の一生を狂わせた

○・Tさん 76歳

撰津市正雀

私は明治四十二年三月生まれの七十才です。農家の次男に生まれ、二十才の適齡検査甲種合格。昭和三年二月現役で広島陸軍病院に衛生兵で入隊し、勤務。四年四月除隊し、その後家事の手伝いをし、六年に結婚。当時は広島市のライジングガン石油会社に務めておりました。昭和十二年支那事変が始まり、十三年二月長男が熱病で病名不明のまま入院し、同年七月に死亡。七忌日の法要をすませ、夫婦とも泣きの涙が乾かぬまま一週間目に召集令状を受け取り、十三日には宇品港を後にしました。妻や子供を不安に思いつつ上海に上陸。

九月に南京に着き、中支戦線の患者を内地や上海病院に運ぶ輸送班で勤務。十一月に漢江戦線の患者を江上輸送するうち病気になり、上海病院に入院して、その後内地の病院に送還されました。十四年三月、一時帰休のため退院。命令が出て帰宅した次第です。帰ってみると戦争は、ますます激しくなり、妻は病気で休み、診察の結果肺結核とのことで、いろいろ養生するうち十六年二月死亡しました。子供二人をつれて途方に暮れているうち、十七年七月大東亜戦争でまた召集令状を受けました。妻が病気の時、家政婦で来て頂いた女の人に後を頼み、子供のことを願い、南方方面に向け宇品港を出船する前日、私共二十名は過余員として内地の一戦患者の看護並びに輸送する勤務を命ぜられました。頑張つて働いているうち病気のため一時帰休命

令で帰宅、会社に勤めるうち昭和二十年再婚。

八月六日八時十五分、爆心から一・五キロ地点で一忘れれることのできない原子爆弾に遭いました。家は焼かれ、みんな傷を負い、命からがら私共は被災地の農家で一時休養しました。

原爆で、電気もなし医者もなし、食糧もなし。家は焼かれ、衣類もなし。文面で話すこともできない有様でした。二日後、私の会社の事務所が爆心地の大手町にあるので、一応見に行くべく出て行きました。現在の原爆公園まで来てみると、人間の死体や馬の死体がころがり、電車は横転し、川には死体が浮き、まるで魚場のイリコ干にしたような情景でした。とり急ぎ被災地に帰り話をすると、これは原子爆弾と聞き、もはや私は死ぬことはできなと思うと、子供と妻のことが心配でした。いろいろ養生しているうち私のふる里

に大風雨が降り、道路、鉄道線は全部不通となり、連絡も取れず二十里の道を歩いて米を頂きに行きました。米を一斗頂いて帰る途中、警察の取り締りに合い、いろいろ事情を話して一応帰りましたが、妻や子供のことを思い一生懸命でした。

この世の生地獄と言うのは当時の状態のことだ、と今思うと身の毛が立ちます。他人の家で六カ月もお世話になった後、広島市宇品に行き、元の人絹工場の社宅の六畳の間を借り、六人で一応暮すことになった次第です。工場もなし、働く所もないので広島を出て鳥取県の妻の里を頼りました。行つて見ると、戦争の傷はどこでも同じで生活は苦しく、子供や妻に大変な苦勞をさせました。なれない仕事で冬には山に木出しに行き、魚の行商もし、大変な苦勞でした。

昭和三十七年大阪に家族一同出て来て、私は町工場の倉庫の管理職を務め、六十才の定年で退職し、子供らも結婚し家庭を持ち頑張っています。もはや七十六才では職もなく、細々とした生活を送る今日です。妻は一昨年乳ガンで大手術を受け、未だに通院し、私も大腸ガンで時々通院と言う有様ですが、これも被爆の結果ではないかと毎日不安な日を送っています。

政府も原爆被爆者援護法を一時も早く制定し、国家補償を実現して頂くのを願っています。また国民の皆様方も、被爆者の心情を御理解頂き、応援して頂くことを切にお願いいたします。今こそ米ソの核戦略に巻き込まれないよう、核を廃絶し、二度と私たちのような被爆者を出さないよう、世界平和のため援護法制定を特にお願いする次第です。

幸にして死だけは免れましたが、被爆二日後の状態は、横川町から十日市町に通ずる電車で、郡部から来た消防隊の方々が死体を運び、負傷者の手当て等をしているのを見ました。道路はアスファルトで、夏の暑い中、焼けた熱で歩くこともできないのでした。道にワラコモを敷き、まだ命のある人を何千とならべ、食事もできず、身は鳥の皮をむいたのと同じような負傷者がならべられておりました。親をよび、子供は母をよび、兄弟をよび、焼けただれた身を焼けた道路で苦しんでいる状態を見ました。この世の生地獄とはこのことでしょうか。どこの国が原子爆弾を落としたのでしょうか。また落とされるようなことを始めたのはどこの国でしょうか。政府並びに国民も現在、今一度真剣に考える時ではないでしょうか。いくら書いても尽きません。目

がくらみ心臓がとまるようですので、
終わります。

私自身が感じた平和について

N・Tさん 13歳

撰津市鳥飼西

私は、これまで平和についていろいろな本を読んだり、先生たちの話を聞きました。その中で一番気のついた原子爆弾のことを中心に書きます。

私は、六年生の時、広島に修学旅行に行きました。その前にいろいろな勉強をしました。今、考えてみれば「まだまだ勉強不足だったな」と思います。今の私でもまだ少ししか勉強していないのに、あの時広島に行ったのがもつたいないような気がします。広島に行った時、資料館で写真や実物を見て私は「二度とこんなことをくり返してはいけない」と思いました。修学旅行が広島に決まった時、みんないやがっていたみたいでした。私もそうでした。けれど今は、勉強になったと思

うし、この作文を書くきっかけになったと思います。

広島のある同和地区の人たちの話を私はある本を読んで初めて知りました。被爆前にも強く差別され、被爆後もその住民だったという理由でその所から出られずに、残留放射能の影響で多くの人々が死んでいきました。彼らは最後まで平等を求めていたと思います。朝鮮や韓国の人々も同様です。日本に植民地にされ、働きざかりの男の人を強制連行されたり、豊かな資源をうばわれたり……。本当に日本は勝手なことをしました。朝鮮や韓国の人々も、二重、三重の苦しみを味わったことでしょう。人々から差別され、ろくな手当てを受けられずに死んでいった人々……。私達はこの事実を知ったからには、この人たちの死をむだにしてはいけないと思うし、絶対に忘れてはいけないと思います。

はじめに書いたように「今の私でも少ししか勉強していないのに……」と今になって思うのですが、小学校で戦争に関して勉強することが少ないような気がします。おまけに教えてもらっても、それについて真剣に考えない子が多いと思います。先生から聞いたのですが、教科書から戦争のことを書いた記事や写真が少なくなっているそうです。歴史の教科書なども、広島原爆ドームの写真がのっているだけで、戦争に関する記事がほとんどないといってもよいような気がします。もし小学校で広島修学旅行に行かなかったら「戦争というのは原爆がおちただけだったんだな」としか印象に残らなかったと思います。平和学習を八月六日にだけするのではなく、もっとこんな機会を増やしてほしいです。先生たちは私達に教科書にはのっていない本当の日本を教えてほしいと思います。

今まで日本がしてきた悪いことを二度とくり返さないためにも……。

今、日本は原子力という核の力にたよって原子力発電をしています。日本の電力のうち、原子力が三分の一をしめているようで、その発電に必要なウランが比較的安く外国から手に入るため、原子力発電が多くなっているようです。けれど、はたして原子力発電というのは安全なのでしょうか。

以前、アメリカのスリーマイル島で原子力発電の事故が発生したことがありました。放射能が外部に漏れ、住民が一時避難する騒ぎになったとか。

日本でも、いつそういうことが起こらないともかぎりません。大事故が起これば広島、長崎におとされた原爆と同じくらい広い範囲に被害がおよぶかもしれません。本当に国は安全を保障してくれるのでしょうか。

今後、米ソの対立がはげしくなれば、いつ核戦争になるかわかりません。そのためにも『被爆国日本』が中心になって核戦争反対を世界の人々に訴えなければいけません。学校は国のしていることについて良いことは良い、悪いことは悪いとはっきりと教えてほしい。そして私と同じぐらいの年の人も、このことをもっと真剣に考えてほしいと思います。

今と違いすぎる私の子供の頃

M・Kさん 47歳

撰津市新在家

もう三年前になります。子供がクラスでの親子文集のプランを持って帰ってきた夜、私が一番先に思ったことは、偶然にも自分の小学校二年生の時が終戦の年であったということ、そして年齢差の多い親子であるとはいえ同じ小学校二年生の八才の一年間の生活体験や思いが、私と娘でこれほどまでに違うものかということでした。それほどうしてだろうか？やっぱり平和な時代と人間同志が傷つけ合う社会情勢の時代との違いだろうか、自問自答を続けながら子供へのメッセージとしての文章を一気に書きました。

『昨年の夏休み、Aと広島の実原爆記念館へ見学に行きましたね。その時

お母さんが話してあげた様々な話、覚えていますか？今、あなたが二年生の思い出を書いている傍で、お父さんとお母さん達もその頃のことを話し合っています。夏休みになると遊びに行く「広島」は母さんの故郷ですよ。あの原爆が広島に落ちた後、多くの人達が死んだときかされたのは、お母さんが丁度今のAと同じ二年生の時でした。お母さんは当時、呉市の対岸の倉橋島にいました。そしてほんとにお母さんは、原爆記念館のパネルで見たあのキノコ雲を、距離は離れていたけれど山の上から大勢の大人達と一緒に見たことを、今もはっきり覚えてます。それからまもなく日本は戦争に負け、八月十五日「戦争は終わった」とのニュースで、周りの大人達のざわめきや悲しみの気配を不安に感じたのも、二年生の夏休みだったのです。亜紀の過ごした二年生とどう違いま

すか？もう少し大きくなったら考えられると思うけど、原爆や戦争という日本の歴史が変わった大きな出来事が、あの幼ない二年生の時の体験だったかと思うと胸が痛くなる程悲しいことなのです。幸せなことに今の亜紀は、先生に恵まれ、良いお友達と良い環境の中で、少なくともお母さん達のような思いはしないで済みます。だからいろいろなことを一生懸命やっつて、楽しい思い出がいっぱい残るような生活をして下さい。楽しい二年生が過ごせましたね』と。ペンを走らせながら私は、八才の時の戦争体験のあれこれを思い出し、胸のつまる思いに涙が出ました。一方で娘の文章は、春、秋の遠足の思い出、運動会の楽しかったダンスの話、耐寒訓練の感想と、ほんとうに子供らしい瞳を輝かせての楽しい思い出です。少なくとも私が今も鮮烈な思いと

なつて残っているあの戦時体験のようなきびしい印象を子供は持ち合わせていませんし、今は持ち得ることもないのです。ほんとうに平和なこの時代を過ごせる幸せをかみしめています。

しかし今、周りを見まわした時、世界の情勢は必ずしも安定したものではありません。将来、平和憲法をうたう我が国の中でも永久平和の保障は、素直に信じられなくなっている世情の今の時代です。あの幼ない体験を悲しみと今なお強く胸に思う我々の多くは、平和の意味も一番にわかっているはずです。あの文集作りの中で、平和を守りぬく強い信念が人間としての最も基本的な姿勢であると強く強く感じましたことを、今また改めて痛感しています。

戦争中の想い出

H・Tさん 70歳

摂津市庄屋

はじめに

昭和十年一月現役兵として、第五師団広島歩兵第十一聯隊第二中隊に入隊しました。当時、平素の教育訓練中「祖国への献身と義務の遂行」は、敵味方を超え人間として讃えるべき普遍の美徳であることを、厳しく教育されていました。

北支の第一線に派遣され戦傷を受ける

昭和十二年七月、日支事変が勃発するや、同月二十七日動員下令。長野部隊杉本中隊の一分隊長（伍長）として、八月一日宇品港を出帆し、北支の第一線に派遣されたのであります。八

月の炎天下、寝食共に事欠く中で戦友と励ましあい、気力をもつて、①料子台付近の戦闘②馬砲川付近の戦闘③鎮辺城付近の戦闘④榆林堡付近の戦闘など昼夜を問わず行軍また行軍に参加したのであります。

九月に入り約一週間休戦し、食糧・弾薬の補給と休養をしましたが、⑤引き続き山西省宛平県東西加斗閣山一、六〇〇メートル高地占領のための戦闘に参加しました。これまでの戦闘とは異なり、なかなか前進することができません。高所の陣地から、迫撃砲、機関銃、小銃などの火器をもつての抵抗が激しく、もっぱら夜間を利用して前進しました。かなりの日数を経て漸く九月十三日夜半までに約三〇〇メートルの地点に達しましたが、さらに距離を縮め、翌十四日中隊長以下全員で午前四時を期し、無言の薄明突撃を敢行したのであります。

敵陣からの最後の手段として投ずる数多くの手榴弾破片により、私は陣地を目前において顔面、左上膊、下腿に重傷を受けたのであります。その結果、左眼を失明したのであります。負傷時は、檜棒で全身を力一杯殴られたような感覚で、同時に失神してしまいました。何時かして戦友の大きな声で、ハッと気づきましたが、両盲目と痛みのため戦況その他一切が判明できず残念そのものでした。

頭上では迫撃砲の音が、シュル、シュルと飛び交い、爆発音と共に騒然そのもので、身動きもできず遂に夜の十時頃までそのままでした。ようやく担架隊に収容され下山し、仮包帯所へ翌十五日到着したのであります。

野戦・内地の病院に転送

その後、第二・三野戦病院に転送され、更に一週間後、北京の第二兵站病院に後送され九月二十八日左眼摘出手術を受けたのであります。受傷から二週間を経過し、視神経のため毛髪一本に障っても痛み、横になつて眠ることもできず座つたままでしたが、手術後は急に痛みが消え、右眼も次第に開くことができました。同じように後送された小隊長、戦友とも連絡が漸くとれ、杉本中隊長以下の戦死と負傷者の状況が次第に判明したのであります。

動員下令時、中隊の編成が隊長以下一五五名でしたが①④の戦闘で戦死者約三〇名の減員があり、⑤の戦闘では残り一二〇数名が参加、突入占拠したのであります。戦死者三〇数名、戦傷者約七〇名と大半が倒れ、一人の分隊長以下約二〇名が何とか無傷で残つたのであります。この戦闘が如何に激戦であつたかを物語っています。

私はその後内地送還の命により、同年十月十一日大阪港に上陸し、大阪・広島・京都・東京の各陸軍病院を経て、ハカ月間にわたる入院生活を送り、昭和十三年五月末日予備役まで免除、除隊となつたのであります（当23才）。

除隊後軍属として勤務

戦争のためとはいえ不自由な体となつた訳ですから、今後は如何にすべきか悩みましたが、上司からの強いすすめもあつて軍属になることを決意し、六月十三日付広島の陸軍兵器廠に雇傭されました。その後、次第に戦争は拡大し、遂に昭和十六年大東亜戦争へと発展したのであります。銃後にある男性は次ぎから次ぎへと軍隊に召集される他、中老の男性を始め婦人会、旧制高・中学校、女学校の学生・生徒に至るまで、飛行場の整備・軍需作業庁の業

務援助、市街地の建物疎開など、戦争遂行のため徴用されました。

私の勤める兵器廠でも、毎日交替で数百人が勤労奉仕隊として終戦まで駆り出され、奉仕させられていました。また兵器の補給業務においては外地は軍人が当たり、内地は主として軍属が命令され、私も東京・大阪・熊本などで兵器輸送の任についたことがありますが、途中で空襲に遭遇し、辛うじてその任務を終了したこともありました。昭和二十年二月から神戸・東京を始め各都市の空襲が頻繁となりましたので、妻子を市外地に疎開させ、単身で市内にとどまり、義父母宅から通勤しましたが、戦況は愈々内地決戦の様相を帯びてまいりました。

臨時召集と原子爆弾の被爆

五月十四日中部第一三九部隊に応召。翌日その内二ヶ中隊が兵器廠に配属さ

れました。幸い広島市の空襲はありませんでしたが、呉市を始めその他の地域の空襲のため、B 29の飛行編隊は宮島上空を連日のように通過し、その都度警戒・空襲の警報があり、廠内編成の防護隊本部の任務に就いたのであります。

原爆投下の前日、八月五日の夜も空襲警報下にありましたが、八月六日午前四時頃には解除されましたので、朝食準備を開始し、七時三十分頃から交替食事というところで、私も八時過ぎ集会所二階において食事を始めました。八時十五分頃「ピカッ」と異様な光があつた瞬間「ドツドツ、ドン」と大音響を発し、窓硝子が飛び散るほか、階段付近の土壁が落下、食卓・椅子が転倒するなど、大型爆弾の直撃を受けたと思ひ、直ちに身を床に伏せました。同時に爆風のため床の一部が吹っ飛び、四メートル下のコンクリート上に数名

と共に落下し意識不明になってしまいました。

何程かたつて兵隊さんの担架に乗り、近くの比治山洞屈入口で降される時、初めて気がついたのであります。その時すでに市中で罹災された多くの人々は、男女の区別すらできぬ状態で「兵隊さん水をくれ」と悲痛な声で比治山を越え、ただ火事のない所へと避難されました。私も全身打撲のうえ、顔面に数力所の硝子破片創を受け、一人行動できない状態でした。私の被爆場所が爆心から二、七〇〇メートルの地点であつたため、火災発生のなかつたこと、建物全壊がなかつたこと、屋内であつたことなど好条件であつたので比較的軽傷でした。兵器廠構内に避難された数百人の罹災者の大半は、火傷を受け重傷者が多く、毎日数人ずつの死者が出ており、全くこの世の地獄そのものでした。

爆弾投下後五日目、友人と漸く比治山の山頂に登り、市内の焼け野原を見たとき「ピカドン」の新兵器は何か？威力の大なることに驚くとともに、ふと焼け野原に居住していた義父母の安全を祈念したのであります。八月十五日終戦を迎え、九月二十七日召集解除、十二月一日軍属を退官しました（当時30才）。

おわりに

日支事変以来八カ年にわたる戦争。祖国のため、青春と共に尊い命を捧げられた数多くの先輩各位の御冥福をお祈りするものであります。

人の生命は地球よりも重く、戦争の無い平和は尊い。平和を追求することは有史以来人類永遠の悲願であるといわれています。世界の人々は、今こそこのことを深く考えて欲しいと切に願う次第であります。

戦争はやめて下さい

N・Hさん 55歳

摂津市正雀

今、思い出しただけでもぞつとします。十五才の時、私は、国鉄に務めていました。国をあげての戦争だったため、二十四時間勤務で、ほとんどの職場の人は疲れきっていました。何時も、アメリカの偵察機が旋回してくるので、私達は、恐怖という感情を越えてしまい、慣れきって、警戒警報が鳴っても、防空壕に避難することがなくなっていました。

その日も丁度、朝の点呼が終わり、八時四十分発の糸崎行の貨物列車を運転するにあたって、私は、機関車の釜の温度を上げるために豆炭と薪を適当にたいて、発車までの時間を機関区のR型車庫の壁にもたれて待っていました。

忘れもしません、八月六日の八時三十分頃……。警戒警報のサイレンがけたたましく鳴り響き、それと同時に真っ黄色の閃光が光ってその状態が約十秒間ぐらい続きました。これが、あの恐ろしい原子爆弾だったのです。誰かの「機関車のボイラーが、爆発したらしいぞ」という声が聞こえました。私はその時の爆風で、およそ三メートルも吹き上げられたでしょうか。やがて地面に叩きつけられ、一瞬、何が起ったのかわけがわからず、誰かに説明してもらわないと、この状態を理解することができませんでした。

まわりの状態も、私の気持ちと同様に、暗黒状態のように真黒で、しばらくは付近が見えませんでした。

職場の同僚達はというと、コンクリートの土間に座りこんで、無表情でいました。どのくらい時間が経ったでしょうか。夜が明けていくように、だん

だんと明るくなってきました。その時、私の目に映った光景は、悲惨そのもので、同僚の一人は機関車の前面のプレート磨きの仕事をしていたのか、前に叩きつけられて両眼は飛び出し、即死の状態でした。そんな状態の人達が何十人もいて、みなこと切れていました。まるで、地獄絵図そのもので、手のつけない状態でした。皆が集まって点呼してみると、一職場四十五名中十名しか無事ではありませんでした。

私達は自宅に帰れず、非常勤務につきました。本当の原爆の恐ろしさというものを味わったのはそれからでした。

広島市は、原爆投下の折、いたる所で爆発が起こり、家はすべて屋根から燃え上がり、寸時にして灰となりました。私が、いつも洗濯をしていた宇品川も、その時、川底は小川が流れるように水量は減り、一週間ほど水のない状態でした。広島市北部の山々も、枯

木のように焼けてしまい、見るも無残な姿でした。

それから鉄道も不通となり、私達はこの悲惨な状態となった広島市を片付けなくてはいけない、という作業につきましました。

広島駅は、プラットホームの屋根の鉄骨が、熱で溶けていました。溶けてしまった鉄橋の手すりには、人達が男女の区別もわからないほどの状態で、手すりにさわって立ったままの姿で焼死していました。その人達を、その場所から移動させる時、驚いたことには手すりに、そして道にその人達の跡形が残っていたのでした。

私も、当時、ガラスの破片が、体全体につきささり、手当てを受けるため臨時の陸軍病院へまいりました。そこでの様子もひどく、ある人は体の骨が見えるほどケロイドがひどく、皮膚がめくれているため、その皮をはがし、

後は荒縄でしばるといような治療でした。その人は少しもいたがらず治療を受けていたようですが、やがて亡くなられたようです。

このような状態であったにもかかわらず、国は「アメリカが特殊爆弾を使用したが、わが軍は戦争の勝利を信じて、戦いはこれからだ」というようなビラを貼り、また飛行機からマイクを使って、戦争の勝利を叫んでいました。しかし、私はこの時、「戦争は負ける」と思いました。

今はずっとも平和な時代です。このような悲惨な出来事を経験しなくてもいいのなら、絶対にこんな経験などしたくありませんでした。しかし、私が見てしまった、このたった一日の出来事ですが、経験していない人達に少しでもその悲惨な様子がわかっていただければ幸いです。経験した者が声をそ

ろえて、きっと叫ぶでしょう。「戦争は、やめて下さい」と。